持続的な交流の創造
ＪＴＢ交流文化賞　受賞地域のいま――2016

第12回「ＪＴＢ交流文化賞」の募集が8月1日から始まった。交流の創造により地域活性化を目指す「持続可能な取り組み」を応援する賞で、受賞後にはＪＴＢと受賞地域とがさらに連携を深めていく。ここでは共に第11回優秀賞に輝いたＮＰＯ法人おもてなしスノーレンジャー（北海道札幌市）と気仙沼つばき会（宮城県気仙沼市）の取り組みの今をリポートする。

――第11回（2015年度）優秀賞

気仙沼つばき会（宮城県気仙沼市）

漁師が帰りたくなる港へ
―気仙沼つばき会による女性目線の観光・まちづくり

宮城県気仙沼市は、魚市場とその周辺の水産業が町の中心産業。気仙沼の港は、かつて航海に出る船を見送る「出船おくり」でにぎわっていた。威勢のいい演歌を流しながら港を出ていく漁船、風に舞う七色のテープ、手を振り見送る人々……。しかし、そんな風景は、漁業資源保護のための減船、収益性の低下による外国人船員の増加などにより、だんだん規模も小さく、少なくなっていった。

そんな状況に危機感を抱いたのが、市内の女性でつくる「気仙沼つばき会」だった。それまでは、家族や関係者だけで行っていた出船おくりを、一般市民や観光客を巻き込んでイベント化し、にぎわいを取り戻した。さらには、気仙沼魚市場を巨大な朝食会場にした「市場で朝めし。」の開催や、気仙沼のヒーローである漁師たちに光を当てた「気仙沼　漁師カレンダー」の制作など、町を活性化する活動を継続している。

ＪＴＢと共に地域交流拡大を

大漁旗を振ってサンマ船を見送る出船おくり

軍艦マーチや演歌が流れ、漁業関係者や船員の家族が「いってらっしゃい」と言って手を振るなか、マグロ船やサンマ船が紙テープを引いて港を出ていく。旅館・ホテルの女将を中心とする女性の組織「気仙沼つばき会」が、この出船おくりを観光客も参加できるイベントとして企画し、始めたのは2010年5月。その翌年の11年3月11日に東日本大震災が起きる。

気仙沼つばき会の高橋和江会長は「産業がズタズタにされて、この町はどうなるのだろうという危機感をみんなが感じた」と当時を振り返る。震災をきっかけに気仙沼つばき会の活動方針が変わることとになる。「とにかく不安で、刷り込まれるだろうという発想で企画した。

ＪＴＢと気仙沼つばき会との取り組みが始まったのも震災がきっかけだ。11年10月からＪＴＢが被災地応援のバスツアーを開始。参加者が瓦礫の撤去や地場産業の手伝いをするというツアーで、気仙沼つばき会のメンバーが毎月1台ぐらい来る大型バスに1人か2人乗り込み、町を案内するアテンダント役を引き受けた。夜の座談会にも加わった。「震災後の復興の仕事もあり日々が過酷で、時間を割くのは本当に大変だった。でも、共に手を取って『応援しているよ』『ありがとう』といった都会の女性たちとの交流はとても意義があった」。温かい気持ちを持つ人たちと接する機会を作ってくれたＪＴＢに感謝している。

震災1年後ぐらいから一般の人がこなせる復興の作業がなくなってくると、ＪＴＢのツアーは徐々に「酒の海中貯蔵」や「海のカキを食す会」など体験型の内容に変化していった。観光で地域に貢献するのが狙いだ。また、出船おくりイベントが本格的に復活した震災から3年目、そのつばき会の活動を応援するツアーも組んでくれた。

昨年に「第11回ＪＴＢ交流文化賞」の優秀賞を受賞し、高橋会長は、ＪＴＢと連携した取り組みが今後さらに深まることに期待を寄せている。「ＪＴＢは私たちにない発信力や企画力を持っている」と語る。

また、10月第4日曜日の「市場で朝めし。」といった気仙沼つばき会の取り組みもＪＴＢの知恵を借りて盛り上げたいと高橋さん。「町にはまだ震災でうつむいたままの人がたくさんいる。私たちが外の人から元気をもらったように、外の人たちともっと交流することで元気になる地元の人が増えたらうれしい」。

大きな焼きサンマに顔もほころぶ（市場で朝めし。）

漁師カレンダーのチラシ

交流文化賞受賞の声

気仙沼つばき会
会長　高橋氏

ＪＴＢから太鼓判

地域の取り組みが全国に数ある中で、私たちの団体が入賞するのは信じられない気持ちだった。

つばき会のみんなは、気仙沼の存在を知らしめなければいけないと思った。観光客をもてなすという目的から生まれた会だが、震災によって、おもてなしよりも、漁業にまつわるコンテンツを作ったり、その情報を発信したりして気仙沼の町を盛り上げようという気持ちにシフトしていった」。

震災が契機となって生まれた情報発信ツールの一つに、13年10月に発売した「漁師カレンダー」がある。

「我らが漁師はかっこいいぞということをみんなに自慢したいと思った」と高橋会長。カレンダーは1年間、目にするものなので、人の心に仙沼を盛り上げたい一心で、嫌な顔一つせず、喜びながら楽しみながら活動に参加してくれている。その団体としてのまとまりが自慢だ。

すごい賞をもらったねと対外的に言われるようになった。「ここはしっかりとした団体だ」とＪＴＢに太鼓判を押してもらったような感じだ。

――第11回（2015年度）優秀賞

ＮＰＯ法人おもてなしスノーレンジャー（北海道札幌市）

留学生スキーインストラクター「おもてなしスノーレンジャー」育成プロジェクト～北海道のスキー文化の発展とローカルスキー場の存続と活性化のために～

北海道にはパウダースノーを求めるスキーヤーが世界中から訪れる。アジアの旅行者が増加しているが、スキー初心者が多く、レッスンの要望が増えてきた。しかし、外国語で指導できるインストラクターは少ない。特に英語以外の言語への対応が課題。日本人インストラクターに外国語を習得してもらうより、北海道在住の外国人にスキーを習得してもらう方が早いのでは。スキー・観光関係者が着目したのが留学生だ。

留学生スキーインストラクター「おもてなしスノーレンジャー」の育成プロジェクトが2013年、産学官連携チームによって始められた。留学生に理論・実技講習を提供し、認定指導員の資格を取得してもらう。こうして誕生したインストラクターがスキーレッスンに活躍している。同時に、彼らが自分たちの活動や北海道の魅力をＳＮＳで発信したことが宣伝効果を生み、外国人スキー客の誘致拡大に貢献している。

ローカルスキー場 活性化へ

昨シーズンの講習で認定指導員に合格した16人

「おもてなしスノーレンジャー」の募集は、札幌市を中心に道内に約2700人いる留学生を対象に大学などを通じて行う。受講希望者は年々増えている。13年度の応募者は28人、14年度は30人だったが、15年度は58人に上り、書類選考を実施したほど。15年度の受講者は定員いっぱいの30人で、16人がスキーの技能を認定する「ＳＡＪバッジテスト2級」に合格し、初心者の指導に必要な北海道スキー連盟の「ＳＡＨ認定指導員」の資格を取得した。

スノーレンジャーは、これまでの3カ年で33人誕生している。現在道内に居住しているのは25人（中国21人、台湾4人）。留学期間を終えた後、帰国せずに道内の企業に就職したメンバーがいるほか、ある台湾の男性は、さらに上級のＳＡＪバッジテスト1級に合格し、スキーインストラクターとして道内で活躍している。

「昨シーズンは中国を中心とする個人客からレッスンの希望が増えた。母国語の指導への二ーズは高く、札幌市内のスキー場からは『来シーズンは毎日3人のインストラクターを送ってほしい』という依頼を受けている」。スノーレンジャーの育成、スキー場との連絡・調整を担うＮＰＯ法人おもてなしスノーレンジャーの副理事長、安田稔幸氏はそう話す。道内各地のスキー場から派遣依頼はあるが、インストラクターの学業や仕事、移動手段の都合で現状では札幌市のテイネスキー場、藻岩山スキー場などが活動の中心だ。

事業開始から3年目だった昨年度も、ＪＴＢ交流文化賞の受賞などでスノーレンジャーに注目が集まり、国内外のメディアの取材が相次いだ。現在も、道内のスキー場が加盟する北海道索道協会から安田氏のもとに道内各地の研修会での講演依頼が寄せられている。

今年度以降も毎年30人程度の受講者を募り、インストラクターを増やし、活動の場を札幌周辺のスキー場やリゾートスキー場にとどまらず、ローカルスキー場へと広げたい考えだ。「少子高齢化や施設の老朽化で閉鎖となるローカルスキー場が増えている。住民に長年親しまれ、北海道のスキー文化を支えてきたローカルスキー場に外国人客を増やしたい」と安田氏。

ローカルスキー場の活性化のヒントになりそうな事例が、15年2月に北海道で実施された中国・上海の小中学生12人によるウインターキャンプ。上海のテレビ局の主催で、ＪＴＢ北海道が手配を担当し、スノーレンジャーがスキーを指導した。「この時は札幌、留寿都のスキー場での活動だったが、スノーレンジャーの指導はとても好評だった。スキー以外の活動も周辺観光、雪の中でのバーベキューなど滞在全体を通じて満足してもらえた。こうしたプログラムの実施はローカルスキー場で十分に対応でき、訪日スキー教育旅行の誘致に可能性を感じた」（安田氏）。

外国人スキー客の誘致拡大にあたっては旅行会社への期待が大きい。ウインターキャンプの成功は、ＪＴＢ北海道が、札幌市内の中学校への学校訪問を提案するなど、ビザ（査証）が免除になる教育旅行に組み立てたことも要因の一つという。安田氏は「こうした提案は旅行会社にしかできない。ＪＴＢをはじめ旅行会社と連携して誘客に努めたい」と話す。

実技講習でのレッスン

スキーの楽しさも実感

交流文化賞受賞の声

ＮＰＯ法人おもてなし
スノーレンジャー副理
事長の安田氏

持続的な取り組みに

受賞を契機に取り組みへの認知度が高まった。地元住民も、地域活性化に果たすスキーの価値を再認識した。事業の実施には財源が課題なので、応援してくれる賛助会員を募って持続的な取り組みにしていく。

来年は札幌で冬季アジア大会がある。2018年は韓国・平昌で冬季五輪、22年は中国・北京で冬季五輪。アジアのスキー人口は増加が見込まれる。スキーによる外国人観光客の誘致に今後も力を入れていきたい。

第12回 JTB交流文化賞 募集中！　応募締め切り 2016.9.15(木)

JTB交流文化賞は、地域に根ざした持続的な交流の創造と各地域の魅力の創出、地域の活性化に寄与することを目的として、2005年に創設され、毎年開催しています。第12回を迎えた今回も各地における観光振興に対する斬新な取り組みや、実際に体験した交流文化の事例を募集・選定・表彰するとともに、受賞地域を様々なかたちでバックアップして参ります。多くの皆様のご応募を心よりお待ち申し上げております。

観光振興・地域活性化の取り組みを募集
交流文化賞 組織・団体部門
JTBは、地域の観光交流・地域活性化の取り組みを支援・推進いたします。

「わが“まち”に誇りを持つために」
地域活性化の活動は、従来から地域に生き続けている自然や文化、歴史などの価値を損なうことなく、地域が持つ豊富な知恵や特性を存分に活かしたアイデアを盛り込むことが重要です。等身大のまちの姿をありのままに伝えながら、まち全体でもてなす工夫を見つけた時、旅行者に新鮮な感動を与えられ、地域の皆様はわが“まち”に誇りを感じられることでしょう。そんな地域の取り組みを教えてください。JTB交流文化賞は、新たな発想による地域活性化の取り組みを応援します。

募集内容
名称　交流文化賞 組織・団体部門
対象　組織・団体
テーマ　国内外を問わず、地域として、地域固有の魅力の創出・需要の創造、地域活性化、双方向の文化交流など、オリジナリティを活かした「持続可能な観光」の取り組み事例を募集します。
※前回応募いただいた取り組み事例も応募いただけます。但し、過去に受賞された取り組み事例は対象外です。
応募様式　指定の応募用紙
最優秀賞　1作　賞金100万円
優秀賞　2作　賞金50万円

旅の体験記を募集（一般個人対象）
交流文化賞 一般体験部門
旅で発見！旅で感動！（小学生・中学生対象）
交流文化賞 ジュニア体験部門
目で見るだけでは物足りない。五感で感じて触れあった旅の体験ほど、心に深く刻まれて人生での大きな糧となるでしょう。著名な観光地を訪れるだけではなく、自らが見つけて、知って、交流するという能動的な旅のスタイル。交流文化賞体験部門では、旅を楽しむあなたの、人と人とのつながりやふれ合いから生まれたエピソードを募集しています。
募集内容、応募要項など詳しくはホームページをご覧ください。

第12回 JTB交流文化賞 選考委員

郵送またはインターネット※でご応募いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。
※交流文化賞 ジュニア体験部門は郵送のみ受付
JTB交流文化賞　検索

お問い合わせ先　JTB交流文化賞事務局（株式会社JTB総合研究所内）｜TEL.03(6722)0757（10:00～17:30 土・日・祝日休み）　FAX.03(6722)0753　e-mail: jtb-kbunkasho@tourism.jp
JTB 感動のそばに、いつも。